

第2回「(仮称)新潟市子ども読書活動推進計画策定有識者会議」会議録

日 時 平成21年1月22日(木) 午後4時～6時15分

場 所 中央図書館3階 ビーンズホール

次 第

1. 開 会

2. 教育次長あいさつ

3. 議 事

(1) 新潟市の子どもの読書に関する「現状と課題」について

- ① 質問への回答
- ② 学校図書館支援センターの活動内容
- ③ 団体貸出利用状況
- ④ 読書離れの原因と不読者への働きかけ
- ⑤ 全校一斉読書の現状

(2) 子どもの読書活動を効果的に進めるには

(3) 今後の有識者会議等について

- ① 第3・4回(現場視察等)
- ② 第5回
- ③ 市民フォーラム

(4) その他

4. 閉 会

出 席 者

委 員 : 荒川座長・宮下副座長・足立委員・佐藤委員・正道委員・高野委員

(欠席: 間藤委員)

事務局 : 田中教育次長

学校支援課仲川指導主事・保育課斎藤補佐(指導保育士)

青野司書(鳥屋野小学校)・栗谷川司書(坂井輪中学校)

中央図書館: 八木館長・渡辺課長・持田補佐・山下補佐・子安係長

真島副主幹・餅谷副主査・金子司書

豊栄図書館: 岩野館長, 新津図書館: 三田館長, 西川図書館: 松原館長

学校図書館支援センター: 加藤副主幹(司書)・小林副主幹(司書)

傍 聴 者 2名

1. 開 会

(司 会)

ただいまから第2回（仮称）新潟市子ども読書活動推進計画策定有識者会議を開催します。本日、全員出席の予定でしたが、先ほど間藤委員から欠席という連絡が入りました。

有識者会議は市民の皆さんに公開しておりますが、今日は2人の方に傍聴いただいています。

最初に、田中教育次長よりごあいさつを申し上げます。

2. 教育次長あいさつ

(田中教育次長)

先般の新潟日報で、新潟県が「子ども読書活動推進計画」の改訂策定作業を進めているという記事が出ていた。本市の子ども読書活動推進計画は新たに策定するものだ。

新潟市では、今、来年度の予算編成作業を行っている。平成21年度と22年度に向けて数値目標も挙げたマニフェスト的な手法で重点事業を示す「戦略プラン」を作っているが、その中で「子どもの読書活動推進計画」づくりも事業として挙がってくる。計画づくりは平成20年度にスタートし、21年度に完成する予定でこの有識者会議をお願いしている。

私は、図書館・公民館・生涯学習センターなどの社会教育施設を所管している。生涯学習センターで、子どもの生活習慣が乱れているということで、「早寝早起き朝ごはん」ということを取り組んでいる。昨年度は朝ごはんということで料理レシピなどをやったが、今年度は「早寝早起き」に焦点を絞り、子どもから標語を募集した。川柳や俳句のようなものを小学校6年生に募集したところ、対象児童が7,531人いるが4,617人(62%)から応募があった。学校数も全小学校114か校から90校(80%)の学校、ほぼ全区均等にばらまかれた状態で応募があった。生活習慣を見直すという動機から始めたことだが、子どもが日本語を使ってものを考え、言葉を練って自己表現をする。文字教育、文字文化というものに対して、付随的ではあるが、効果が上がったと思っている。こういうことも読書活動を推進する、読書環境の整備ということに関係してくることだ。入り口を広げたり軟らかくすると、子どもは応えてくれる。いろいろなセクションが連携して読書環境の整備に向けて努力していきたい。

(司 会)

前回欠席されました足立委員から、一言自己紹介をお願いします。

(足立委員)

新潟大学の足立です。今回は私の学会と重なってしまい、欠席させていただいた。事務局

から資料を研究室に届けてもらい、詳しく説明を聞き、大変充実した会議であったと聞き、参加できなかったことを残念に思っていた。今日は楽しみに来た。よろしく願いいたします。

(司 会)

ありがとうございました。

———今回から出席の事務局職員の紹介

———配布資料の確認

では、荒川座長から議事の進行をお願いいたします。

3. 議 事

(1) 新潟市の子どもと読書に関する「現状と課題」について

(荒川座長)

議事に入ります。

①質問への回答、②学校図書館支援センターの活動内容、③団体貸出利用状況について、順番に説明願います。

(事務局)

第1回会議を終えてから、5人の委員の方から「現状と課題」について、文書で意見、質問をいただいた。意見については、この後発言していただく。質問と事務局回答をまとめたものが資料1。その主なものについて補足説明をさせていただく。

No.1は、就学前のアンケートの手法や項目などについて質問をいただいた。委員の意見を受けてアンケートを設定できればよかったが、スケジュールなどの関係で事前に事務局で実施させていただいた。この点についてご了解いただきたい。

No.7で、宮下委員から学校司書の配置状況について、正規職員以外の勤務年数を知りたいという質問が出された。別紙1は、学校司書の経験年数を担当課からデータを出してもらい、事務局でグラフ化したもの。臨時職員が目立つのは、平成17年度に広域合併により新たに合併地区に臨時職員の学校司書を配置したことによる。

No.8の、資料や会議の内容を公にできないものがあるかという足立委員の質問だが、現時点ではない。今後、そういうことが出てきた時は、お話をさせていただきたい。

No.13の学校図書館支援センターについては、何人かの委員から活動内容についての質問がでていたので、この後、報告させていただく。

No.15の保育園におけるボランティア活動の中身については、別紙2が保育園の何園かで

聞き取り調査をしたもの。グループで活動しているほか、個人で読み聞かせのボランティアを行っている方がけっこういるというのが分かった。

No.25の「(小学校の)高学年になるにつれて読書離れが進んで、3、4年生が境目と言われる。このことについての現場の声を聞きたい」という質問と、No.28の「朝読書の中で教師による読み聞かせや朗読はどのくらい実施されているのか。教師も児童生徒も各自が好きな本を読んでいるのか」については、前回も少し話題になったが、現場にいる宮下委員と学校司書から、後ほど話していただきたい。

No.30で、「新潟市で学校図書館ボランティアが入っている割合が少ないのは、司書配置してきたためではないか」という質問については、政令市調査の結果(別紙3)を示した。図書館職員が全く配置されていない政令市が8市あり、確かにそれらの市でボランティアを活用している比率が比較的高いということはいえそうだ。

(前回の「現状と課題」で、新潟市の小学校におけるボランティア活用状況の数字が間違っており、今回訂正させていただいた。前回の30.7%(35校)は、正しくは49.1%(56校)だ。小学校のほぼ半分の学校に読み聞かせのボランティアが入っている。)

No.31「旧新潟市と合併地区で学校図書館ボランティア活動に違いがあるか」という質問。文部科学省調査では小学校のボランティアは読み聞かせがほとんどで、56校で行われている。旧新潟市と合併地区の違いとはなかった。読み聞かせ以外のボランティアでは、図書の修繕、学校図書館の書架見出しや飾り付け、地域開放の支援などが小学校では17校で行われている。

No.36の地区図書館の状況については、前回は中央図書館の記述が多かったので、別紙4で地区図書館、地区図書室も含めて活動の状況等についてまとめてある。また、『図書館要覧』に全市の活動状況の概要が出ている。

続いて、資料2「学校図書館支援センターの活動内容」につきまして、支援センターが設置されています西川図書館から報告する。

(松原館長)

昨年4月から、西川図書館に学校図書館支援センターということで正職員が2名配置になった。2人とも小学校と中学校で学校司書として長年の経験がある指導的立場の職員だ。

新潟市は全国的に見ても早い時期に学校司書を採用していた。最初はPTA雇用だった学校もやがて公費に切り替わり、旧新潟市においては、平成10年度に正職員と非常勤嘱託を含め、全校配置を実現してきた(小中学校合わせて86校)。その後、平成17年の広域合併によりこれまで学校司書が配置されていなかった新市域の学校にも配置を進めたが、こちらは、財政的な理由などから臨時職員による学校司書が配置され、現在に至っている。

支援センターが最初に西川にできた理由として、まず合併後の新市域の学校図書館と学校司書を支援するという役目があった。旧市内に勤務する正職員司書や経験豊富な嘱託の学校司書と比べ、新市域の学校司書は勤務年数も3年以下ということで、力の差がある。学校現

場から要望の多い読み聞かせの技術の習得をはじめブックトーク（テーマを決め、テーマに沿って関連した図書を紹介し、テーマに興味を持ち理解を深めてもらうというもの）、見やすくきれいな図書館だよりの作り方、おすすめ図書の紹介や本の修理など、ベテラン司書だとたいがいひととおりでできるが、新人の場合だとなかなかそうはいかない。

支援センターでは、学校司書のスキルアップを図るため、研修会や説明会、情報交換会を行っている。教師が調べ学習で必要とする図書や参考資料を探す場合も、自分の学校だけでは足りない場合、公共図書館から本を集めたり、公共図書館に調べものを依頼をすることもある。そういうサポートを支援センターと公共図書館が担っている。これまで公共図書館では団体貸出などで資料提供はしているが、支援センターでは学校司書の経験者が各学年ごとのカリキュラムを考え、それに合うような資料を探すことができるというメリットを感じている。

西川図書館では総合教育センターから小学校・中学校の教科書を譲り受けており、教科書を開いて、学校が今どの資料をほしいのかということを確認しながら資料を提供することができる。また、図書館としても学校図書館支援用に必要な本を購入している。

新市域の学校図書館には長い間司書がいなかったもので、本の整理や管理が十分ではない。学校司書が配置されてから、児童生徒を呼び込むような掲示や飾り付けなど、図書室が見違えるようにきれいになったと言われる学校や、学校図書館がきれいになり、子どもたちが大勢やってきて貸出冊数が大幅に伸びた学校もある。

学校司書の配置による効果は大きかった。支援センターでは個々の学校の司書が行っている日々の学校図書館の活動を支えるとともに、新潟市が目指す学校教育あるいは学校図書館の目標に向かって少しでも前進するように事業を進めていきたい。

具体的な活動内容について説明する。

「訪問・相談」。年度の始め、西蒲区の全小中学校を回った。各学校図書館の現状を把握するため、校長先生と会い、図書館を見て、学校司書に話を聞いた。先生方からは、何をしてくれるのだろうという期待と多少の戸惑いも感じられたが、学校司書からは、相談に乗ってもらえるということで歓迎された。

学校からの問い合わせや相談が今年の1月の途中までで約100件。そのうち資料関連の相談が32件で一番多かったが、そのほかに司書の業務に関するさまざまな相談が寄せられた。試行の中でも課題が見えてきた感じがある。

実務に関する相談は多岐にわたるが、具体的に研修をすとか解決策をアドバイスするなど対応がしやすい。しかし、学校図書館としての活動の方向性や学校の教育目標に対してどのように活動していったらいいとか、学校の方針について司書はどのように対応したらいいのかというような質問については、学校教育に直接意見を言うということがはばかれるケースもあり、少し躊躇がある。

いずれにしても学校図書館がもっと活用され、児童生徒の読書活動が広がるように、また

学校内での教師と学校司書の距離を縮めていけるように努めていく必要があると考えている。

夏休み期間の学校図書館を地域開放した学校のうち2校の現場を見て来た。教育委員会では、地域に開かれた学校を目指すため、昨年度から学校図書館を地域に開放する取組をしている。今年度、西蒲区では、小学校13校、中学校1校で実施された。支援センターとしてどのような支援ができるのかということを考えている。

「研修会・情報交換会」。6月に情報交換会を開催した。西蒲区21校のうち19校が参加し、情報交換のほか、公共図書館のサービスメニューや連絡事項について説明した。こちらでも好評で、12月に2回目を行った。小学校の西蒲区代表校長から、学校図書館についての意見や期待ということ話を話してもらい、学校司書の実践発表などの後、意見交換をした。忙しい先生方への学校図書館としての働きかけや展示、おすすめ本の取組など、それぞれ学校司書のアイデアを発表、西蒲区内の学校司書のつながりが出てきたということで、効果が上がったと思っている。

強い要望があった読み聞かせの講座も行った。また、教育委員会主催の学校司書全体研修会では、学校司書として全国的に有名な五十嵐絹子さん（元鶴岡市立朝陽第一小学校）の講演会の企画に協力した。

今年度は、これから、学校図書館の蔵書の除籍についての研修を計画している。この要望も学校からたいへん強くあった。新市域は学校司書が配置されて間もないこともあり、これまで古くても捨てられずにきた蔵書が大変多く残っている。学校図書標準との関係を踏まえ、それぞれの学校の状況に応じた除籍の考え方や手法についてアドバイスをし、図書館が使いやすい蔵書構成になるように考えたい。

支援センターの運営について。まず、担当司書を各種研修会に派遣している。教育委員会内部の関係者会議と西蒲区の学校関係者による運営協議会を開催している。小学校・中学校司書の会に参加して情報交換会や連携を図るとともに、西蒲区で発行している図書館だよりの1ページを使って「学校図書館支援センター通信」を発行、図書館利用者、学校関係者、保護者及び地域住民へのPRをしている。これはホームページでも見ることができる。

支援センターは試行ということでスタートしたので、暗中模索している部分もある。もっといろいろなことができたのかなと思う反面、学校との連携を考えると、支援センターだけが事業を先走って行うということも難しい。こういうところが課題かなと思っている。

（事務局）

前回、小中学校が団体貸出を利用する際、だれがいつ公共図書館に本を借りに行くのかということが話題になった。会議の後に、小中学校の実情について事務局で調査をしたので、説明させていただく。

（栗谷川）

市立図書館の団体貸出は、小中学校合わせて約9割が利用している。本の運搬はほとんど司書が行っており、勤務時間内であれば出張として認められている。司書が貸出・返却する

時間帯は、勤務時間外、勤務時間内外両方が8割。理由としては、「忙しくて勤務時間内に外出する時間がとれない」「通勤途中や居住区に図書館があるのでついでに寄る」「急を要するために」となっている。

昨年の全国学力テストの分析で、学校図書館を利用した授業を行った学校はたいへん学力が高いと報告されている。学校図書館活用の授業が増えるためにも、図書の充実のために公共図書館との連携が重要だと考えている。

(荒川座長)

次に、④読書離れの原因と不読者への働きかけと、⑤全校一斉読書の現状について、まず宮下委員より願います。

(宮下委員)

私の今までの学校での経験から、5年生、6年生から急に子どもたちが本を好きになって読むというのはなかなか難しい。やはり小学校低学年からの読み聞かせや自分自身の読書習慣を身につけるなかで、本のおもしろさがよく分かる子どもが育つ。それを繰り返すことで中学年、高学年と、本を読む子が育つのではないか。それでも少し気を抜いたり、条件が子どもたちにとって厳しくなったりすると、読書習慣はすぐに後退してしまう。それが中学校の現状なのではないかと思う。

新潟市では、(児童1人あたり)65冊くらいが学校図書館の1年間の平均的な貸出冊数かと思う。多い学校は80冊、100冊と借りている。100冊借りる学校の子どもたちが中学校に行ってもどのくらい本を読むかと言えば、小学校で身に付いた読書活動というものほとんど影響がないという程度に低くなる。私が校長をやってきた下山小学校とか亀田東小学校でも、中学校に行っても本物になったかともみると、なかなかそうはいかない。そういう厳しさはある。

(荒川座長)

学校図書館司書の2人から話してもらおう。

(青野)

小学校では、1、2年生のころは絵本を中心に読んでいき、高学年になるにつれて文字の多い物語に進んでいく。3年生、4年生のところで子どもたちの興味、関心が大体固まってきた、子どもによっては図鑑やスポーツなどの解説書の方にいってしまう傾向がある。そこでいかに文学の方に関心を持ってもらうかというところで、司書が支援をしたりしている。

高学年になると、勉強だけでなく児童会や学校行事の準備などで時間をとられてしまい、図書館に来る時間がなかなかとれない。高学年の生活の中で、本を身近に置き、図書館に来る時間を確保するというのが大事だと感じている。3年生から6年生にわたって、読まない子、借りない子には、貸出履歴などをよく見て学級担任と相談しながら声かけをしたり、おすすめの本を紹介したりしている。どんな傾向の本が好きなのかというのをよく観察しながら、本を手渡ししていけるように日々仕事をしている。

(栗谷川)

小学校であればほど本に親しんでいたのに、中学校になると二極化する。全く本を読まない子と、本当に本が大好きで年間300冊以上読む生徒もいる。小学校のように「図書の時間」がないので、なかなか司書の方から本を薦めるということができない。昼休みの図書館も、坂井輪中学校では120人くらい来るが、おしゃべりに来たり本を読んだりというのが多く、本を借りる生徒はごくわずかというのが現状だ。

6年前から、読書のきっかけを作ろうということで朝読書をやっている。先般実施した朝読書のアンケートで、「心に残ったものはありますか」という質問に、かなりの生徒が挙げていたので、少しほっとしている。

中学校での読書指導は大変難しいものがある。

(荒川座長)

学年が上がるに従っての読書離れの一番大きい要因は何か。中学になって読まなくなる、読めなくなるのか分からないが。一生懸命やっても二極化していると言われると、「そうかな」と思うところもあるが。

(栗谷川)

中学になると、やはり部活動や受験、それと世界が広がり、いろいろなゲームとかテレビとかもある。外に出かける機会、映画とかもあり、やはり読書だけというわけにはいかないかと思う。

(荒川座長)

本を読むとか読めるということが、実は受験にとって極めて大事だというのが私の実感だ。私は大学入試センターで3年半くらいセンター試験の元締めをやっていたが、数学とか理系の問題は、国語ができなければ解けない。すべての学力の基礎は国語だというのは、センター試験をみても実感としてある。

(事務局)

前回出させていただいたが、中学2、3年生でテレビ、ビデオ、ゲーム、パソコンを全部合わせると、平日で3時間32分というのが新潟市の中学生の平均時間だ。この中に食い込んでいけるかどうかというあたりなのかという気がする。

(足立委員)

国語科教育というのはももとの私の領域だ。例えばアメリカでは、「読むことの力」を測るときに、小学校では「物語」と「説明的文章」と測っているが、中学校と高校と上るにつれ、試験では物語の割合がどんどん低くなり、説明的な文章とか、何か課題を解決するために読む文章で読む力を測る割合が上がっていく。中学生や高校生になって読むことに必要なことは、文学的なものをしみじみ味わうだけではなく、先ほど荒川座長が言われたように、数学的なものを考える、何か課題を解決する、そういうときに読んで頭を働かせるということだというふうに、テストを作っている人たちは考えている。

中学校の読書指導も自分自身にとって課題で、もっとうまくやりたいと考えている。余暇時間にやっている読書の割合が少ないと嘆くだけではなく、例えば授業中に教科書やいろいろなものを読みながら頭を働かせていくという形が、中学生や高校生の健全な姿なのではないか。余暇時間にしみじみ読書というのではなく、もっと幅広くいろいろなメディアを使いこなしながらものごとを考え、自分の道を切りひらいていくという方向で読書ということ幅広く考えていかないと、へんなことになるのではないか。

(正道委員)

先ほど、小学校3年、4年で興味や関心が固まってきて、文学から離れてスポーツや解説書の方へいってしまうということが言われたが、それでもいいのではないか。本を読むということは何も文学だけではなく、資料を調べたり自分の興味のある図鑑などでも、本に親しむ、活字に親しむ、言葉に親しむということで評価されていいのではないか。

出版界では、「朝読書」が始まって、10分間くらいで読めるアンソロジーが出ている。その前には、ブックスタートで赤ちゃんにも絵本をとということで、今まで出ていなかったような、0、1、2歳児向けのものが続々出てきた。出版は不況だから、売れる方へとどうしても流れていくわけで、アンソロジーとか短編集とかが続々出ている。

私が仕事を始めたころは、短編では本にならない、100枚以上の物語でないと売れないと言われていたが、今は逆に長いものが売れなくなっている。しかし文学を味わうということならば、やはりある程度長いものを読むこと、あるいは読んでもらうということでもいいのではないか。

(高野委員)

保育園では、0歳から就学前の子どもを預かっているが、4か月くらいの子どもでも本当に絵本を見る。子どもは活字ではなくて絵を読む。絵本を与えていると、私たちがうっかりしているものでも、例えば表紙と同じ絵があると、「あった、あった」とか、いろいろなことで感動したりする。年長児くらいになってくると、昔話とか生きる力とか、いろいろなものが入ってくる。もっともっと私たちが勉強をしながら、段階を踏みながら、楽しいものを与えていかなければいけないと感じている。

私自身が子どものころは、祖母から昔話を聞いたりということもあったが、社会の流れとともに、昔のものばかりも言っていられない。しかしやはり底辺にある大事なものはある。そのあたりも大事にしながら、今の社会にも合せながらやっていくことが大事だ。

(佐藤委員)

なぜ読まなくなったかということ、この会である程度はつきりさせた方がいい。もちろん受験とか、忙しいことなどがあるのだろうが、やはり私はメディアが関係していると思う。

「早寝早起き朝ごはん」の講演を幾つかやっているが、その中で調べてみると、小学校高学年から中学生になるとメディアとの接触時間がやはり増えている。そこの関係をはつきりさせた方がいい。しかし、メディアは敵対するものではない。例えば電子ブックのような

ものはアメリカでも非常に使われているというし、本を読む形態が違う形になってもいい。そことどう融合させるかというのはこれからの問題だと思うが、まずは今の子どもたちの読書時間が減っていく原因、特に中学校で減っていく原因をはっきりさせた方がいい。

(荒川座長)

それについて、ご自身はどのように考えているか。

(佐藤委員)

多分、受験を一生懸命やっている子は本を読んでいる。暇があるからゲームをやる、やることがないからゲームをやる。自分自身の経験で言うと、私は50代だが、私の世代の強みはものがなかったので本を読むしかなかった。あるいはラジオを聞くしかなかった。だけど今から思うと豊かな時間だった。今の子どもたちは、ものはいっぱいあるけれども豊かではない。暇だからゲームセンターに行ったりしているので、そのところをもう少し導いてあげるといい。

(荒川座長)

宮下委員は説明された側だが、補足なりあるか。マンガの現状はどうなのか。

(宮下委員)

教師の側からみると、マンガも見ない子どもたちが多いのではないか。私たちの子どもの時代にマンガを狂ったように見ていた子どもたちというのは、今はないのではないか。幼児のときにテレビの中のキャラクターものに影響されて、アンパンマンや怪獣ものなどに興味を持ち、学年が進んでもそれが忘れられずに読む子どもはけっこういるのではないかと思うが、その子たちもそんなに狂ったように読んでいるという感じではない。

(青野)

先ほどは説明が不足だった。子どもたちが図鑑やスポーツの解説書にいくという話をした。それはそれでかまわないが、そこから自分の関心をさらに深めてほかの領域の本を読むようになるのがなかなか難しい。虫なら虫の本だけを読むとか、あとは子どもによっては図鑑を見ながら、字を追っているのではなく写真を追っているとか、絵を追っている。そこからどう抜け出させるか。字の多い本も読むようになってほしい。子どもたちに「虫の本が好きなんだね、じゃあこの本はどう？」と言って、説明文のある理科の本を薦めると、「これは字が多いからいやだ」というふうになってしまうことがある。文学だけではなく、その本を突き進めて読むというふうにもっていければ一番いいなとは思っている。

高学年になると図書館に来る時間がないと言ったが、身近に本があれば、課題やテストが終わった後や給食準備の間だとか、すき間の時間を見つけて子どもたちはよく本を読んでいる。時間を作って図書館に来たときには、非常に熱心に集中して読書をしている。本を読むこと自体はとても好きなのだ、日常の中で感じている。

(荒川座長)

宮下委員、子どもが本を読むためには保護者の読書が多分に影響があるような気がするが。

(宮下委員)

あとでお話ししたいと思うが、子どもたちを取り囲む大人が本を読んで楽しんでいる様子が子どもに伝わらない。教師も含めて、今の時代はそういう状況がないのではないか。今の若いお母さん方は子どもの本のおもしろさを知らないのではないか。私たちよりも少し若い人たちも含めて、探偵小説を読んだり恋愛小説を読んだりということも少ないのではないか。だからなかなか子どもたちのところにはいかないのではないか。

(2) 子ども読書活動を効果的に進めるには

(荒川座長)

先ほどの話と重なるところもあると思うが、順番にご意見を伺いたい。

(宮下委員)

子どもの読書活動を推進するための願い、夢を話させていただく。

先ほども話したが、子どもたちに本を好きにさせる、読ませるためには、子どもたちの周りの大人が、本はおもしろいと思い、いつも本を読んでいる姿を見せることに尽きるのではないか。幼児のときや小学校低学年のときにそういう大人の姿に触れた子どもたちは、本当に本のおもしろさが分かっており、時間的な制約や自分の興味が広がっても、本を見る機会はけっこうあるのではないか。

その本を読む後ろ姿を見せてほしい人はだれか。例えば親であれば、子どもが3人いれば3人が本が好きな子どもに育つだろうし、学級担任であれば、クラスの30人か40人の子どもたちが本を好きになるだろう。司書が読書が大好きだということ子どもたちにも知ってほしい、そのおもしろさを体感してほしいということであれば、それはそれでかなり広い子どもたちが読書が好きになるきっかけになるのではないか。校長がそうなれば、学校全体がそうなることはかなり確率が高くなるのではないか。

教師がどうしたら本が好きになるようにやれるか。子どもの本だけではないが、子どもの本を読む機会が与えられるにはどうしたらいいかということで資料で幾つか挙げておいた。教師のためのおすすめの子ども本のリストを一生懸命作った。

まず、自分のクラスの子どもたちに薦めるときの教師が参考にしてもらえようなリストと、教師として何を讀んだらいいかということで作った資料だ。中学生にとっても、「ハリポッター」のような話題性のある本が取り上げられれば、けっこう子どもたちは讀んだのではないか。

2番目は、教師の感性や能力を高めるための子ども本のリスト。学級経営や授業が上手になれる本のリストを解説付きで作し、いろいろな先生に本を紹介したり、自分の学校の新採用の先生方に働きかけをしている。それでも本を読んでもらうのはなかなか難しいと感じている。

最後の手ということで、教師は案外真面目なので、授業に直接役に立つ本のリスト。例えば、遠足に明日行くとする。子どもたちは前の日からうんと楽しみにしている。行ったときにいろいろなことを学んで帰ってくる。友達とどのような関係で学んでくるのか。その山とか川とか名所旧跡等も含めて学んでくる。そのために前の日にこの本を読み聞かせをするというリストを作りたい。これは司書の方だけに任せるわけにいかない。司書と協力し、それぞれの専門の教科の先生方の意見も聞きながら作りたい。これからの私のライフワークだと思っている。

最後に、図書館司書にも、図書館の整備や図書館の本を子どもに貸し出すためのいろいろなテクニック、あるいは環境づくりだけではなく、教師や校長も含めて、学校全体の中で図書館の司書が大きな位置を占めこと、図書館が学校の中心になっていいという力量を付けてもらいたい。

このようなことを言うと語弊があるが、図書館司書や養護教諭は、学校の中では一人ぼっちの仕事だ。一人職場であるから、お互いに切磋琢磨したり、いろいろなものを学んだりする機会は本当に少ない。自分が持っているものを秘密にしたとは言わないが、それを紹介してみんながやるという方向で研修会を開いたり、あるいは仲間とやったりということは少なく、せめて好きな本を保有するくらいだ。そういうところに教育委員会が手を貸したりしながら、あるいは学校図書館支援センターがやっていく必要があるのではないかな。

学校図書館支援センターは、学校の現場を知っていて指導してもらいたい。そういう意味で学校現場にも長く安定して自分の仕事にかかわれ、力量をつけていく。そういう人を育てて支援センターに回ってもらい、あるいは交流するというようなことを、是非教育委員会にはお願いしたい。

最後に、私は、県立図書館の図書館協議会委員やいろいろな活動の推進委員もやっているのですが、ほんぽーとと県立図書館の職員の方たちが本気で子どもに本を好きにさせるために、研究や働きかけを協力してやってもらいたいと願っている。

(佐藤委員)

私は学校図書館司書というイメージがよく分からなかったのだが、宮下委員の話で、司書も養護教諭も一人ぼっちの仕事だと聞いて、確かに養教の人は一人で大変だと私は分かるので、司書の立場が分かり勉強になった。

私は小児科医だから皆さんと立場が少し違うのかもしれないが、「小児科医が考える読書」ということで話をさせてもらいたい。

荒川委員がいて少し言いづらいのだが、小児科は臓器別ではなく子どものすべてを診る。小児科医は子どもだけではなく親も診る。これは小児科をやっている人間はみな感じていることだ。親も診るとするのは、風邪をひいたお母さんと診るということではなく、子どもの後ろ側を見ていないと小児科医はやれないと思っている。

今私たち小児科医が、病気を治しても子どもたちは幸せになっていないと感じるときがあ

る。病気でなくても、親が子どもを愛せないなど、今までの小児科医学では解決できない問題が目の前にある。社会環境が親子や家族関係に大きな影響を与え、子どもたちを追いつめていると気付いて、小児科医も一步を踏み出さなければならないと思っている。

現代の子どもに必要な成育環境の変化は著しい。子どもの発達に必要な遊び・睡眠・愛される体験を確保できていない。現在の子育ての状況が子どもの体と心に影響していると感じている。情報化社会にあつて、仮想現実さらされている時間の増大と、実体験の減少が子どもの生命感覚の歪みさえも生じさせている。佐世保の事件はその象徴的な出来事だった。

子どもの疾病構造を見ると、肥満、糖尿病、自律神経失調症など、生活習慣病が見過ごせないような状況にあり、自殺、不登校、引きこもり等、社会問題になるような心の問題も抱えている。この辺が私の考える基調だ。

3年前に軽井沢で、NPO法人「子どもとメディア」というところが主催したセミナーがあり、参加してきた。参加者は約80人で、セミナーハウスに1泊して、いろいろな議論をする。ほとんどが小学校の先生と保育士だったが、小児科医が3人ほどいた。このときに、島根県雲南市の久野小学校、レジメに写真があるが、全校生徒がこれだけのしかない学校だが、ここの伊藤校長先生が、この小学校でやった「ノーテレビデー」という活動を報告していた。レジメは、先生に電話をして、いただいたデータを公表していいかと聞き、了解を取ったものだ。現在、伊藤先生は松江市の教育委員会にいたのだが、読書とノーメディアをからめて非常にいいデータを取っている。1週間子どもたちをメディアから解放しようという試みだ。小さな町だからできることなのかもしれないが、実は埼玉県の蕨市（人口増加が激しいところだが）でも同じような報告があった。1週間家族を含めてテレビを消してしまおうという取り組みだ。1週間テレビを消しただけなのに、その後テレビの視聴時間が持続して低下している。ここに何が起こったか。テレビから解放されることで、子どもたちやその親たちの生活が変わって、テレビを見なくてもよくなったということだと思う。

前回、本当にメディアが悪いのかと小児神経学会で疑問視しているという話が出された。そこを科学的に証明するのは難しいかもしれないが、私は伊藤先生が示してくれた子どものアンケートの記述方法がすべてを語っているような気がする。「ノーテレビデーがもたらしたもの」は、同じお子さんで、上が1月13日、下が10月2日。学年が変わって5年生から6年生になっているが、1学年上がっただけでこんなに字が上手になったわけではなく、テレビを見る時間が減っていることで、子どもたちに何かが起こっているということを端的に表していると思う。（1月13日では）アンケートにがしがしと書いていた子が、こうして（10月2日では、きれいに）アンケートを書くようになった。このプリントを見たときにとてもショックだった。

次は、私の小児科医院のホームページの掲示板だ。少し前の書き込みだが、この方は1歳半検診で発達に異常があると言われ、非常にショックを受けて相談された。私もうまいアドバイスが思いつかなくて、「ではテレビでも消してみたら」と思わず言ってしまった。そう

したら子どもが本当に変わってしまったということを書いている。このような経験は1例や2例ではない。子どもたちがメディアから1週間、2週間離れることで、子どもの変化を親が体験している。メディアづけのメカニズムは仮説なので全部確定しているわけではないが、長時間のテレビ、ビデオで、「対話の減少に伴う対人関係の障害」がやはり一番大きな部分なのだろうと思っている。

一番下に書いてある「コミュニケーションツールとしての本、読書を位置づけられないか?」。私が対象として頭の中に思い浮かべるのは就学前の子どもたちなので、絵本ということを少し考えた。

次に、「現代の子育て事情」ということで、雑誌の切り抜きからとったものだ。今の子どもたちの状況と書いてあるが、丸で囲んだ部分、「室内で過ごす」、「子どもと遊べないと訴えるお父さん、お母さん」を時々耳にする。親の時間もほしいというのは当然だと思うが、昔は家族がたくさんいてだれかしら子どもをみてくれ、ある程度「サザエさん」の世界であったのに、今は全く読んであげる時間がない。つついテレビ、ビデオに偏ってしまうというのが現状だと思う。

電子メディアとうまく付き合いながらこの社会で生きるには、人間の原点、人と人が一緒にいることが楽しい、うれしいという感覚を親子に身につけてもらうことが必要だ。人にかかわることを子どもは本質的に求めている。お母さんと絵本を読んだり、友達と遊んだりすることに喜びを見いだす前から、王様のように1人で電子メディアと過ごすことに慣れてしまうと、なかなかこちら側には戻って来れないような気がする。

最後に、今回の計画策定に小児科医として望むものとして、まず、「子育て支援の視点からの読書」。いわゆる子育て支援は子育て支援センターの機能にみられるように、親の孤独・不安の解消を目的とした「親の居場所」確保だが、子どもが過ごす時間と空間がその子どもの発達に必要な環境であるのかどうか、という視点が必要だ。図書館や学校図書室が「子どもの居場所」として確保されるためにも、例えば子どもの意見を取り入れる工夫などが考慮されてもいいだろう。

次に、「ノーメディアなどの具体的な提案」。担当者の研修や保護者への啓発などの漠然とした提案ではなく、読書に誘う具体的な施策の提案を行っていききたい。前述の松江市の教育委員会は読書推進に絡めたノーメディア運動とデータの集積を試みていると聞いている。松江市と連絡がとれるようであれば、是非情報を集めていただきたい。

それから、「乳幼児検診などを利用した本に親しむ工夫」。乳幼児検診は子育てを始めた家族へのファーストタッチだ。新潟市では3ヶ月検診は個別化されているが、市の委託事業であり、例えばブックスタートなど具体的な提案を行政側から行っていただきたい。

それから、「軽度発達障害児への読み聞かせのアプローチ」。国の「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」の中で、「障害のある子どもの読書活動の推進」では、視覚・聴覚障がいを対象に検討されているが、いわゆる軽度発達障がい（ADHDやアスペルガー

など)、普通の保育現場に今多数いる環境調整の難しい子へのアプローチに対する提案を盛り込みたい。みんなで集まってきちんと聞く読み聞かせだけではなく、体を動かし遊ばせながら行う読み聞かせなど、いろいろな試みの提案を行っていけないだろうか。今1クラスに1人くらい授業でじっとしていない子がいる。その子たちも取り入れるような提案ができないかということをお願いしている。

以上が私の提案だが、事務局で小児科医会の「子どもとメディアの問題に関する提言」のプリントを作ってもらったが、前回これが話題になったので、この提案を作った内海裕美先生という東京の小児科医会理事に話を聞いたものをメモ的に書いておいた。

前回話題になったのは、「小児科医会の提案ではメディアが子どもの発達に影響すると言うが、小児神経学会の見解と相違がある」という点だが、今回のメディアに関する提言は、小児科医会ではなく、日本小児科学会、日本小児保健学会のいわゆる三者協での少子化対策への提言でも採用されている。今回プリントを付けたが、「小児科連絡協議会における少子化対策への提言」(平成16年2月9日)では、救急医療とかいろいろ書いてあるが、「子どもとメディアの関係の見直しについて」ということではっきり触れている。小児神経学会は日本小児科学会の分科会で、その学会でもこういう提案をしている。小児神経学会も否定をしているわけではなく、科学的な検討が必要だと言っている。

しかし、実際にはまだそれがよく分かっていない。小児神経学会のメンバーが最も気にかけているマスメディアの問題については、1歳6か月検診にくる子どもたちのテレビ・ビデオ視聴時間と言葉の数の関係に有意差があるということで、北九州の小児科医会がデータをとって発表した。それが新聞記事(平成16年3月10日、毎日新聞)で出て、言葉の発達の遅れがあると言って、自閉症はもしかしたらテレビでなるのではないかという議論になってしまったものだ。1歳6か月の評価というのは年齢的に非常に難しく、その辺があいまいなので、この辺に関しての評価は小児科医会も少し避けているという雰囲気があった。

(提出したメモで)かっこでくくった部分は私の付け足しだが、小児神経学会ではメディア(NHKなど)を含めたシンポジウムを行い科学的な検討を行うとしたが、その後結果は報告されていない。NHKは、メディアが子どもの発達に有効な働きがあるという仮説の下に検討を行うということをはっきり言っていたが、その結論は出ていない。

アメリカの小さなNPO「TV-Turn off Network」が1995年に呼び掛けた”TV-Turn off Week”“が今や連邦政府や教育省、アメリカ小児科学会もバックアップする全米的なラインで広がっている。アメリカ小児科学会は科学的根拠があるなしにかかわらず、テレビをやめることをやめる理由がないではないかということで、全面的にこの運動をやっている。日本でも科学的な根拠という前に、テレビを見るメリットが本当にあるのかということを見ると、少し見ない時間を作ってもいいのではないか。

正道委員から質問のあった、「テレビの視聴時間を2時間までと提言しているのは科学的根拠があるのか」ということだが、結論から言うと、科学的根拠はないが、子どもの一日の

日常、寝る、食べる、遊ぶの中で、通常の生活ではテレビを見ることのできる時間は2時間程度だろうという推測と、学力テストとテレビ視聴時間の検討があり、視聴時間が1時間以内の者と4時間以上の者とは有意差が出た。学力テストという公平な方法ではかっているの、やはりテレビは4時間以上は見ない方がいいのではないか。そこから2時間と規定し、その後一部の小児科医にアンケートをとっているが、95パーセントの小児科医が妥当と評価している。

最後に、「幼稚園児童のテレビ、ビデオ視聴とテレビゲーム遊興について」だが、これは新潟のはまぐみ小児医療センターの東條先生が子どもたちのテレビ視聴時間を調査したものだ。調査によると大体4時間近く見ている。

事務局が行ったアンケートでは、2時間以上見ている子は少なく、とてもいい子だなと思ったが、よくよく見てみれば設問の仕方が、「見ていない」「30分」「30分から1時間」「1時間から2時間未満」「2時間以上」となっている。親が大体この辺だなと丸をつけるとしたら、なかなか2時間以上に丸をつけるわけではないので、設問の仕方がまずかったという気がする。これを基礎に新潟市の子どもたちのメディア環境を話すのは少し無理かなと思ったので、調査件数は少ないがこういうものも出ているので提供させてもらった。

(荒川座長)

長時間テレビを見ると老化が進む。我々の年代でも2時間以上見ると進む。我々も中止しなければいけないところがありますね。

(高野委員)

保育園から感じられる子どもの姿をお話しさせていただく。

今の保育園は、(園によって違うが)生後2か月から就学前までのお子さんを預かる。どこの園の子どもたちも絵本が本当に大好きだ。園では、1日の生活の中で好きな絵本が見られるような環境の中にいる。時には保育者から一斉に同じものを読み聞かせてもらったり、昼食後や早朝、延長の時間などに好きな絵本をじっくりと楽しんだり、小さなクラスでは先生の膝の上で読み聞かせを楽しんだりしている。子どもたちは大好きな絵本は何回読んでも、「もう1回、もう1回」と、絵本がぼろぼろになるまで楽しんでいる。絵本の中に心が入り込み、体を動かして真似てみたりするようになる。絵本の中にはリズムがある。子どもは音楽がなると体を動かすが、絵本のリズムを楽しんだり、ごっこあそびの世界を楽しむようになっていく。そんな子どもの日々の成長の姿を見ていると、赤ちゃんのときから、段階を踏みながらの本の読み聞かせが大切だと、日々思う。その大切さを園内のみではなく、やはり父親や母親、そして家族のみなさんにも発信し、ともに楽しんでいく努力が必要だと思っている。

子どもは絵本が大好きなのだが、ゲームも確かに入っている。一日ボーッとしている子どもも確かにいる。ゲームをしていたりテレビを11時過ぎまで見ていたりして登園してきました、などというときには、一日ボーッとしている。

保護者が子どもの後ろにいる。うちの園の保護者がどうというのではなく、また、それが悪いというのではないが、保護者の姿は、昔私が保育者になったころからするとすごく様相が変わってきている。けっこう自己中心的であったり、言い切りはできないかもしれないが、保育園に任せてそれでいいというような姿も多々見られる。そのことを頭から言ってしまうと感情論が入るので、上手に言うと保護者は素直な部分もたくさんある。お子さんを真ん中にしながら「こういうことが大事ですね」というようなことを話していくと聞いてくれる。

絵本に関して言うと、自分が絵本を楽しんだというお母さんが非常に少ない。うちの園でも実践に関しての講演会などをけっこう設けているが、そのときに講師の先生や私からも、「お母さん自身が楽しんだ絵本、あるいは心に残る絵本がありますか」と聞くと、あるというのは本当に数名だ。

「本を通して親子のふれあいが必ずある。寝る前に読んだり、だっこして読む。その10分でも5分でもの時間が大事だ」ということを伝えている。保育園で育っていくもので大事なものは、やる気と意欲だ。子どもに「しなさい」と言っても、絶対にそれはつくわけではない。環境もあるし家庭力などもある。一概には言えないと思うが、私たちはプロとしてやはり大事なものを発信していかなければいけないのではないかということは切に感じている。

次に、「絵本の読み聞かせを通して」。これは私だけの意見ではなく、親しい園にお聞きしたが、どこの園でも絵本の実践はされている。紙芝居をたくさんしている所もあるし、絵本を中心にしているところもある。個人的に言わせてもらおうと、私は絵本が大事と思う。それはやはり最初があって終わりがある（紙芝居にないかと言うとそうではないが）、深みがすごくあると思う。

小さい子どもたちも、たとえば、ひろかわさえこさんの『ぶくちゃんのねんねんぼっぼ』を読みながら、「ねんねんぼっぼねんぼっぼ」と寝かせてあげると寝る。よちよち歩きだが、ぬいぐるみを持ってきて、「ねんねんぼっぼねんぼっぼ」とかしている。園の先生方には「（段階を踏まず）ぼんと飛んで与えるということは絶対にだめですよ」ということをよく言っている。年長児になるとかなり難しいものが読めるようになってくる。昔話などいろいろな所から出ているが、やはり作者や絵を選んで与えるようにしている。

うちの保育園では、絵本を通してごっこ遊びが必ず何回も展開されていくので、それを発表会に活用させてもらっている。子どもたちが中心人物になったり、自分の表現力で、例えば昔話の「浦島太郎」であれば、太郎はこのときどんなだったのだろうということを話をしてくれる。それがたまらなくうれしい。発表会で母親たちが見に来てくれるで、「私たちが言ってくださいとか、やりなさいと言ったのではなく、皆さんのお子さんの心から出ている言葉なのですよ」ということを話すと、本当に感心されている。そういうことが大事なのだということを感じていただいている。

うちは卒園児の子どもたちも園に自由に入れるようにしている。この前も、下に在園児がいる卒園児が（この子は西川図書館でも読んでもらっているということだが）、母親が帰る

うと言うのだが、園の絵本に夢中になって帰らない。そのときに母親が、「先生、本当に絵本の実践をしていただいてよかったです。算数も読解力がないと解けないのですよ」と話していた。私も自分の子どもを通してそう思う。喜んでいる声も聞かせてもらっているので、さらに私たちはいい形の中で伝えていかなければいけないと思う。

「これからの課題」としては、0歳から就学前までの大事な子を預かっているのも、やはり職員が（私も含めてだが）専門的な情報の交換ができたり、絵本の選び方とか、どういう形で親に伝えていったらいいかということも勉強して、自信を持ってお話できるような職員になっていかなければいけないのではないかと切に感じる。私たち職員だけではなく、父親も母親も、おじいちゃまもおばあちゃまも入ってもらえるような研修会を計画してもらえるのであればうれしい。

（正道委員）

私が前回、日本小児科医会の「子どもとメディア」の問題に対する提言の根拠にこだわったのは、今のお母さんはとても真面目だからだ。例えば、「子育てにテレビがだめだ」となると、先ほどの佐藤委員の「現代の子育て事情」でも子育て不安ということが指摘されていたが、特に母親が子育ての主流になっている現状では、何かあったときに周囲から「お母さんの育て方が悪いのではないか」と言われたり、自分を責めるところがある。家庭で育児する人、特に母親にプレッシャーをかけるのではなく、表現としてもサポートする姿勢を示すようにしてほしい。ので、表現として少し軟らかいものがあるのかお尋ねしたかった。横越公民館で2004年から2008年まで、赤ちゃん学級（すくすく学級・ぴよぴよ学級）の1コマで、子どもを育てているお母さんに本について語ったり、2004年から2007年まで行っていた絵本講座での母親たちとの話し合いやふれ合いの中から、そういうことを特に感じていた。

しかし、そういう所に来る方々は、絵本に興味があるとか子育てに興味がある方が主だ。事務局が先回用意提出したアンケートも、保育園や子育てセンターに来る方で調査している。ある程度子育てや絵本に興味のある方を対象にしている。（そういう意味では）あのアンケートもバイアスがかかっているのではないか。子どもにあまり関心を持たないお母さんも実際にいる。両極化、二極化していると思うが、市としては、あまり関心のない方も含めてサポートしていくような方策がとられたらうれしい。

佐藤委員からもブックスタートという言葉が出された。ご存知の方もかなり多いと思うが、1992年、イギリスのバーミンガムで始められた、赤ちゃんに絵本を手渡し、親子のふれ合いの仲立ちとして絵本を使っていこうという運動だ。英国ではその当時移民の増加などもあり、識字率を高める意味もあったらしい。日本に伝わったのが子ども読書年の2000年で、2001年から各地で始められている。識字率というよりは、親と子のふれ合い。子育て不安の中で、どう子どもに話しかけたらいいか分からないというときに、絵本がその仲立ちになるということだ。合併前の白根市や横越町などでも行われていたが、合併に伴い、旧

新潟市でやっていなかったということで、それに揃えられて、やらない方向になってきている。検診のときに本を持って行って、お母さんに説明をして、実際にボランティアの方々が読んであげるといことで絵本の大切さなどを伝えてきた。予算の関係などもあり、絵本を手渡しすることはできなくても、検診や何かで、特に子育てに熱心でないお母さんにもしていくような方策がとられたらいい。

高野委員が保育園のことで話していただいたが、まさにそのとおりだと思う。私もボランティアや講師として新潟市以外の幼稚園や保育園などにも行ったりしているが、本当に子どもたちは本が好きだ。よく民俗学で「ハレ」と「ケ」と言うが、ボランティアにお願いしてやる読み聞かせは「ハレ」だと思う。「ケ」というのは普段の読み聞かせで、自宅でお母さんやお父さんや家族が読んであげる。その中間が保育園だと思う。「ハレ」はイベントみたいなものだから、お祭りで、プログラムを作ってやるが、「ケ」では寝っ転がろうが途中でやめようがいい。保育園や幼稚園というのは、子どもたちをよく知っている先生達が地域とか発達状況に合わせて、あるいは季節の行事などに合わせて本を読んであげる。家庭でお母さんが本を読まず、子どもに読み聞かせもしていない場合に、幼稚園や保育園というのはかなり重要になると思うので、市としてもサポートをしてほしい。

あちこちの幼稚園、保育園を見てくると、本置き場がないところがある。図書室のように立派な1室を持っているところもあるが、廊下の隅っこや階段の脇の方に本棚のようなものがあったりする。どういう整理をしたらいいのか、どのような本を用意したらいいのかも、職員の方に指導するとか、団体貸出のシステムがあるとか、リサイクル本の提供ができるということなども知らせてほしい。あるいは配送システムもできればお願いしたい。先ほどの学校図書館の課題でもあったが、サービスがあるのは分かっているけれども時間がないから取りに行けないとかと言われる。何かの形で市のサポートが欲しい。

高野委員も話していたが、現場の保育者、先生方へ本の管理のテクニック、読み聞かせのノウハウ、選書、あるいは園児のお母さん、保護者の方々にも子どもの読書についての指導とか、講師、講演会、そういうことを市でサポートしたらいい。

子どもたちは絵本が好きのまま小学校に上がってくるが、3、4年生から本離れが進んでいくのはなぜか。合併前の学校図書館は、司書がないところでは、物置と言っては失礼だが、そういう状況だった。本棚と本があれば学校図書館、というわけではない。

これまで自分は、学校図書館と司書教諭の関係というものをわりと曖昧にとらえていたが、ある本（『しらべる力をそだてる授業!』赤木かん子）に出会い、納得した。司書教諭というのは、図書館の本と子どもたちを結びつける者、教育の方に図書館の本を役立たせる者。一方、司書は、実際に図書館そのものを構築する人。どういう資料を集め、どういう本を捨てるか。ただ冊数だけあればいいというものではない。その辺の管理をするのが司書の役割だ。

今回、資料を見るとずいぶん臨時職員の学校司書が多くなっている。それも経験が3年く

らいの方が多いとなってくると、やはり1校を1人の司書でやっていくことはなかなか大変だし、ノウハウなども支援センターのサポートが必要だ。

学校図書館というのが学校の中でどのような位置づけをされているのか。今回いろいろ聞いてきて、やはりまだ寂しいかなという感じだ。昨年11月1日に中央図書館で、「子どもと絵本」という松居直さんと佐々木宏子さんの講演会が、子どもの読書活動に関心のある方々、保育士や幼稚園の先生や教職員、ボランティアなどを集めて行われた。その講演会である男性の教員が、どのような本を読んであげたらいいのでしょうかということを質問した。とても熱心な方で、それはいいと思ったが、心の中で、それはお宅の学校の司書に聞いたらよく分かるのではないかと思った。確かに、東京から来た偉い先生に聞くのも必要だけれども、「あなたの学校にも司書がいるよね」と、心の中で思っていた。

教師にとって学校の図書館がどのような意味を持っているのか。子どもの調べ学習のためだけなのか。授業を構成していくためにも役立つような学校図書館であってほしい。そういう学校図書館を支えられる司書であってほしいし、そういう司書の力をつけるためのサポートを市でやってほしい。

私は、守備範囲が幼稚園から小学校くらいで、中学校のことについては分からない。今回、たまたま高校の担任の先生と知り合いだったので、ある県立高校の学校図書館を見せてもらった。その司書に聞いたら、やはり小学校のときにきちんとしてきてほしいということと言われた。高校も二極化して、読む子は読むけれども、読まない子は読まない。図書館にもなかなか足を運ばない。しかし、その子どもたちも受験や就職のときにレポートや小論文を書かなければならなくなってくる。その力というのは、小学校、中学校のときに読書することからできる。先ほどの、『しらべる力をそだてる授業!』でも、小学生でもそういうレポートの書き方を教えれば書く、そういうことをすることも司書の役目なのだと書かれており、目から鱗が落ちるような気がした。私が言いたかったのはそこなのだ。文学的な楽しみを伝えるのも確かに大事だけれども、実際に役立つというようなことをやってほしい。

公共図書館については、新潟市は大分やっているし、ボランティア活動なども盛んにやられているが、ボランティア講習を旧新潟市以外の図書館でも是非やってほしい。ボランティア講習をやったからすぐに独り立ちをしてボランティアに行きなさいではなく、やはり1年間くらい選書やプログラム作りなどの支援をしてほしい。

(足立委員)

2つのことをお話する。1つ目は、学校のことを中心になる。私がこの春何をやってきたかということ絡めてお話する。2つ目が公立図書館や新潟市に期待することだ。

1つ目だが、私自身は教員養成系の大学で教師になる人たちを育てるという仕事をしている。専門は国語科教育の中の読書指導だが、外国でどのように国語科教育が展開されているかということ調べる機会が(留学を含め)かなりあった。驚くのは、日本の国語教育というのは、本当に読まないでやっている。日本という国は、物事を考えたり作り出したりする

ときに、資料が手元になくてもできてしまう国だ。何かしら手がかりにする資料や情報やメディアなどを使いながら作り上げていくという経験が、私たちにはあまりないのではないか。そういう人たちはどういうことになるかということ、結局、資料だとか裏付けなどを取らずに世の中を渡っていく。私にはとても丸腰な感じに見える。

そうではなくて、後ろ盾になるようなものを持たせてあげたい。そういう教育をするためにはどうしたらいいのか。国語科教育を変えなければならない。そのためには、教員養成の段階で国語科教育をもっと私を変えなければならないと思った。私も宮下委員のように必読リストのようなものを作り、学生時代にこういうものは読んでおきなさいということ言うようになった。それだけではなかなか難しいので、去年、新潟市と提携して、（その前からうちの学部ではやっているのだが）現職教員の読書指導ワークショップというものを始めた。もう少し読書指導的によくなるような授業をやって欲しいということだ。読書指導をしていくための指導方法というものを教師もあまり知らないし、どういふ本を使えばそういう授業ができるのかということも分からない。指導方法をいろいろと紹介して体験していただくということをやってきた。こういうことをやっていると、かなり学校の中で授業の組み立て方を変えていくことはできるのではないか。もう少し物事を考えるときに資料だとか本だとか情報を手がかりにしながらかえていく人間が育てられるのではないかと考えてやっている。

手がかりになるのはやはり教室の環境作りだ。「学級文庫」という言い方でも少し不足なのだが、アメリカの学校で作っている「クラスルームライブラリー」の映像などを見せたりすると、日本の状況との違いが一目瞭然だ。

2番目の方に話の重心を移していくが、そういう学級文庫というものがアメリカでどのように作られているのだろうかといったとき、後ろ盾になる学校図書館や公立図書館があるのだということが分かってきた。

今年に入り、全国学校図書館協議会の主催するアメリカの図書館ツアーで、ボストンとシカゴとニューヨークの市立図書館を見てきた。ボストンで面白かったのは、学校図書館と公共図書館が一緒なのだ。子どもたちが持っている学校図書館を使うためのカードは、実は公共図書館のカードで、カードの発行は学校でできる。学校で本を借りたいと思ったとき、その学校で所蔵してなければ公共図書館からダイレクトに借りることができるという体制が、ボストンではできていた。

日本でそこまで要求するのは難しいかもしれないが、新潟市で学校司書をきっちり配置できていることを考えると、学校図書館の資料イコール公共図書館の資料であるとか、学校図書館へのアクセスイコール公共図書館へのアクセスである、くらいのことが考えられればいいのではないかと、夢として思っている。

図書館ツアーで見たことをさら紹介する。メディアの話が先ほども出ていたが、本という媒体ではなく、データベースを使いこなしてレポートを書くとか、何か発表をする。発表もポスターに書くとか、パワーポイントでプレゼンテーションをするとか、論文を書くとかい

ろいろな形があるが、そういう学習活動が学校図書館で非常によく行われている。

そのデータベースはもちろん使用料がかかるのだが、ボストンの場合は、ボストンパブリックライブラリー（公共図書館）がお金を出している。学校図書館はお金をかけずに、学校図書館が持っているホームページから直接入って行って、IDを使って必要なデータベースにアクセスしてレポートを書くとか、プレゼンテーションの準備をするということができる。印刷するとかポスターを作るという教材、プリンターなどが整えてある。公立図書館と学校図書館をうまく結んで、子どもたちの学習活動が実際に変わってきているのだという事例を見せられると、新潟市であればそのようなこともできるかもしれないという期待が湧いてくる。

先ほど教室の授業を変えなければという話しをしたが、例えば読書へのアニメーションという（どこかでお話する場面があると思うが）子どもたちの数だけ同じ本が必要な読書指導の方法がある。新潟市の図書館でも40冊ずつのセットを作ってもらいたい。そうしたら先生達は授業で役立てられる。40冊違う種類の本を持ってこられると、ではそれぞれ読んでくださいになるが、同じ本を揃えてもらおうと、そこでできる授業がある。

あるいはワークショップなどでは「リテラチャーサークル」というものをやったのだが、1クラス40人とすると、同じ本を5冊ずつ8種類のセットを作ってもらおうと、教師の側で5冊ずつの組でグループにして読ませるといった読書指導ができる。

そういうアイデアを私はたくさん持っている。そのアイデアをどこかの形でお見せして、公立図書館に助けていただきたいということを具体的にやっていきたい。その本の貸し方や指導方法についてやれることがあるのではないかと考えている。

公立図書館から学校図書館を助けることとして、教員研修へ講師を派遣してほしい。公立図書館の司書は、学校司書以上に子どもの本も含めて、本に対する知識を多様に充実したものを持っていると思う。その知識を是非学校の先生方に提供していただきたい。私も教員養成をやっていて、学生を丸腰で教師として現場に出しているということには責任を感じている。宮下委員には素晴らしいリストもあるが、専門の方に教えてもらおうとかなり学校の先生方が分かることがあるはずだ。

アメリカや、よく話に出るフィンランドなどでは、教師が修士号を持っていたりする。特にアメリカでは、読むことを専門に教えられるというリーディング・スペシャリストという肩書きのマスターを持った人たちがいる。そういう人たちは、1年間子どもの本について勉強する機会が与えられている。こういうときにはこういう本とか、こういうタイプの本があるとか。日本ではなかなかそういう機会を持つことができないので、専門家の市の図書館の方に教師に教えてもらうような機会を設けていただきたい。

学校図書館や学校の方でこういう読書指導をしたいということのを待つのではなく、図書館からこういうやり方はどうですかということのをどんどん提案していただきたい。現場の先生方は非常に忙しく、専門性という点では十分ではないところがある。こういうやり方であれ

ばこういう読書指導ができるとか、こういう本であればこういうことが教えられるとか、そういうプログラムを新潟市の図書館で作って、学校図書館の方にどうですかというようにやっていただきたい。もちろん、私はいろいろアイデアがあるので、協力できるところはしたい。そのような形で具体的に学校現場を助けていただきたい。

いろいろと持ってきたアイデアを、これまではどこに出していいかよく分からず、せいぜい教員養成の大学の中で、教員になる人たちにこういう本を読んでおけというくらいしか言えなかった。今日この会議に参加し、ようやく日の目を見るチャンスが来たと思っている。

(荒川座長)

私は平成14年に大学を辞めてから、高等学校を1人で回り始めた。

医師を養成する際、医師が必要なものは知識と技術だと言うが、もっと大事なことは心だ。心に欠けた学生が多くて、そのため今の医師に対するいろいろな批判がある。何とか心の問題をしたいということで、高校を回って医学部に進学希望する生徒に話をするというのを始めた。

最初は、私が高校へ電話してもなかなかうまくいかず、何しに来るのかという感じだった。平成16年に大学入試センターの所長になった途端に、高校はウエルカムで、入試センターはどうぞおいでくださいとなった。少しでも若い学生、生徒が、高い志と熱い思いを持って医学部にチャレンジしてほしいという願いを持ってこの6年間やっている。今年は4校、これまでに15校くらいを回っている。3年前から県も応援してくれ、やっと1人ではなくなった。

昨日は、新潟高校の医師コースで話をさせてもらった。幾つかのスライドを使い、こんな話をした。

——大学というところは専門家を養成するところで、医学部では医師を養成する。医師や専門家になる人は、理系ではなく文系の勉強、国語の勉強をなさい。大学ではリベラル・アーツといって、言語系の勉強が必要であるということは、11世紀のころから欧米でも日本でも世界中でやられていることをまず知って欲しい。

我々の仲間には神様のように思われている、ウィリアム・オスラーという人がいる。世界のナンバーワンと言ってもいいくらいの人で、今のアメリカ医学教育を作った。この方が「3つの人生の道」ということを言った。医学部の学生は一生懸命勉強しなさいと。誘惑はあるけれどもそれは逃げなさい。徹底的に勉強する癖をつけなさい。徹底して基本の勉強をなさいと言うとともに、「ベッドサイド・ライブラリー」ということを言った。寝る前の30分、寝床の中で本を読めということだ。何を読むのかというと、聖書、モンテーニュの随想録、ギリシア神話、シェイクスピアの戯曲など。こういったものを読むことによって医師としての人間性の成熟、社会人の常識を持つことができるというようなことを言っている。

私もベッドサイド・ライブラリーがある。ベッドサイドといわずあちこちに置いてある。例えば司馬遼太郎の『胡蝶の夢』。あれを読むと日本の医学の歴史が分かり、先人の心が分

かる。また、池波正太郎の『鬼平犯科帳』を読むと人の心が分かる、情けがある。

私は、大学入試センターで3年半、入試の問題を作っていた。体力、気力がなかったら入試はだめだ。脳も人間の体なのだから脳を鍛えて、栄養をやって休め。どうしたら体力、気力が出るかといえば、朝早く起きて、朝ごはんを食べて、早く寝て、そして身だしなみをきちんとすること。

我が郷土の平澤興先生は、「勉強しすぎて、身体を壊した人はいない。怠けるから体が不調になる。勉強をすれば体がよくなる」と言っている。

——こんなことを話している。高校生がどこまで聞いているのか分からないが、私が言いたいのは、自分の専門以外の本を読みなさいということだ。ウィリアム・オスラーは、大学生でやっても遅くない、やりなさいと言っている。

私の最後の提案は、「寝床の中の図書館」を赤ちゃんからやったらどうかということだ。高校生が大学に行くためにも、医者になるためにも、医学以外の、受験以外の本を読みなさいということだ。入試センター試験では、数学、物理はやはり国語の力だ。国語の力がなければ解けない。国語の力がある人がやはり成績がいいような気がする。私はこのようなことを高校生に話している。これが子どもの読書活動にもつながるかなと思っている。

(3) 今後の有識者会議等について

(八木館長)

今後の会議の持ち方と5月30日に予定している市民フォーラムについてご説明させていただきます。

今回は学校等の現場視察としていたが、視察先を保育園と小・中学校の3か所、視察終了後の意見交換の時間を含めて有識者会議を2回に分けることとした。

第3回会議は、3月2日(月)の午後1時から、宮浦中学校と沼垂保育園を視察する。第4回会議は、3月6日(金)の午後1時30分から、万代長嶺小学校を視察する。いずれも、担当者からの説明と図書館や図書室での子どもの様子などをご覧いただき、第4回では、中央図書館に戻り、感想を含めた意見交換会を行いたいと考えている。荒川座長についてはあらかじめ日程の確認をさせていただき、2日は参加、6日は公務のため欠席と伺っている。なお、第3回と第4回は現場視察のため、非公開とさせていただきます。

今回は都合のつかない委員もいると思うので、これとは別に視察希望があれば4月、5月中くらいに段取りしたいので、申し出ていただきたい。

第5回会議は、当初予定していなかったが、5月に計画している市民フォーラムの前に持たせていただきたい。内容は、協議いただいた「現状と課題」や本日の「子どもの読書活動を効果的に進めるには」の意見などの集約(これについては市民フォーラムの場で参加者に配布したい)と、パネルディスカッションの進め方についても協議していただきたい。

市民フォーラムは、5月30日（土）の午後、市民プラザ（NEXT21の6階）で開催する予定で、基調講演を柳田邦男氏に、その後、有識者会議委員によるパネルディスカッションを行いたい。パネラーには、足立委員、佐藤委員、高野委員、宮下委員の4名の方をお願いしたい。この日は残念ながら、荒川座長は海外出張のため欠席の予定だ。コーディネーターはできれば篠田市長と考えている。

なお、フォーラムについての一般市民向けの広報は4月中旬から行いたいと考えている。

4 閉会

（司会）

以上で、第2回有識者会議を閉会します。